

## N19b 歴史的記録による前期惑星状星雲の検出

平井 正則 (福岡教育大)、藤原 智子 (九州大・理)

AGB 星の惑星状星雲への進化は比較的短い時間スケール (数百年～数千年) で起こることが理論的に予想されている。写真技術による天体の測光や画像の取得が始まったのは 19 世紀末であり、この遷移過程を観測的に同質データで比較することはまだ難しい。

我々はこれらの遷移過程を検出するため、「Catalogue of Galactic Planetary Nebulae (Kohoutek, 2001)」の中で前期惑星状星雲候補天体と分類されている 335 天体について、歴史的星図と照合し、検討した。用いた星図は「Uranometria (Bayer, 1603)」、「Prodromus Astronomiae (Hevelius, 1690)」、「Atlas Céleste (Flamsteed, 1776)」の 3 文献である。座標照合の結果、上の歴史的星図に現在の惑星状星雲に対応する可能性がある天体を発見した。これらの天体は、歴史的星図には恒星として記録されているが、現在はこの位置に恒星として同定できる天体は見当たらない。そのため、当時は AGB 星であり、現在は惑星状星雲として観測されている天体の可能性がある。

本講演では現惑星状星雲の過去の姿 (AGB 星) として考えられる候補天体について、その惑星状星雲の測光的・分光学的観測の特性をもとにその可能性について議論し、AGB 星から惑星状星雲への進化について考察する。